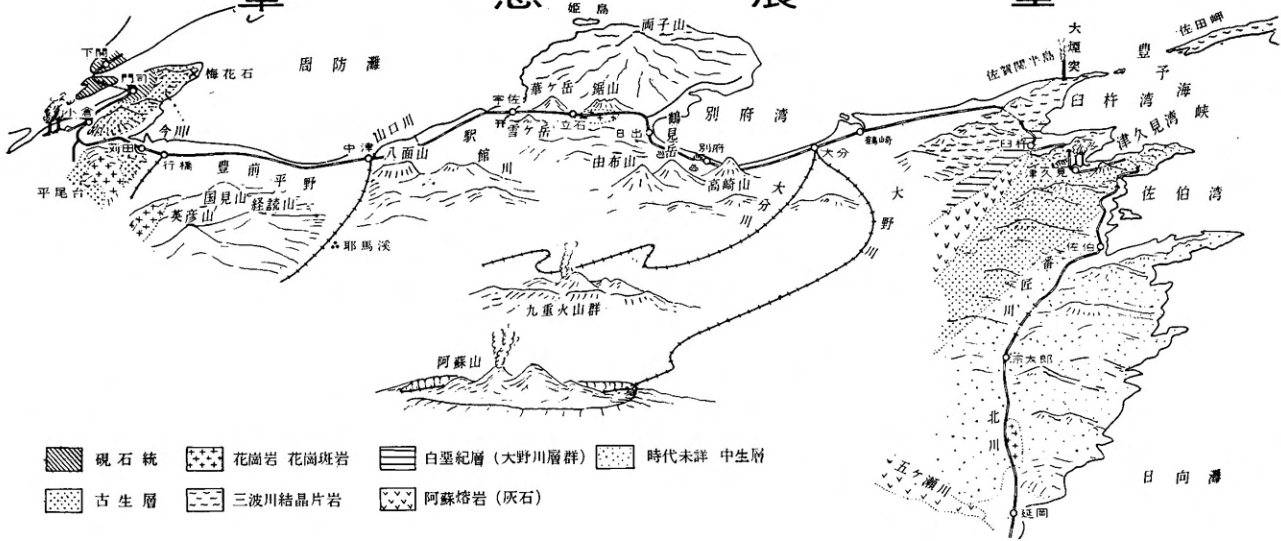


望 展 窓 車



- 硯石統
- 花崗岩 花崗斑岩
- 白堊紀層 (大野川層群)
- 時代未詳 中生層
- 古生層
- 三波川結晶片岩
- 阿蘇熔岩 (灰石)

日 豊 線 (その1)

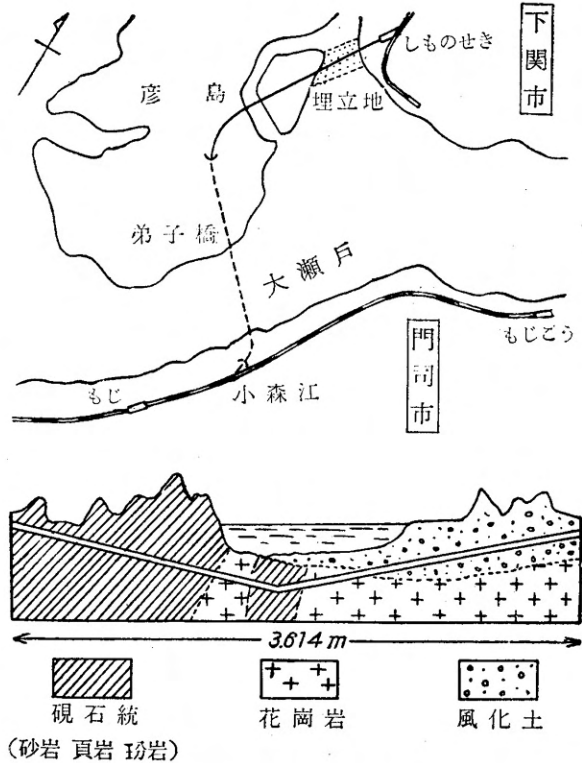
関門トンネルをくぐって

下関市街の西をかすめて南下すると 埋め立てた海を短い鉄橋で彦島へわたり 汽車はあつさり と本州をはなれる。

いよいよ 明治以来の夢を実現させた関門トンネルにもぐり 深さ20m余の海底下 さらに17m

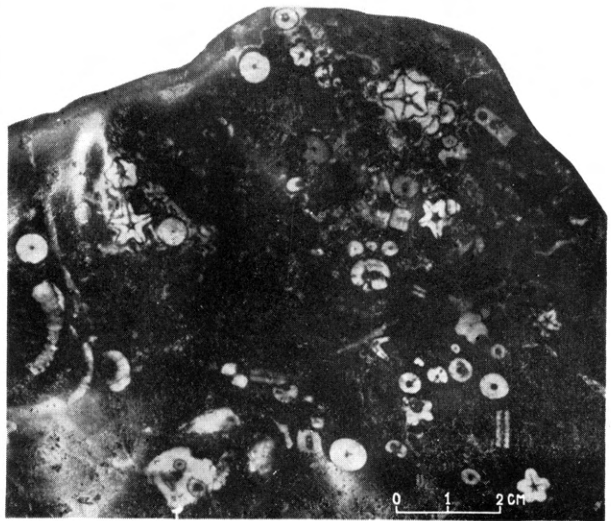
の地底を対岸の門司まで わずか10分足らずで到着する。

このトンネルは昭和11年の秋に着工して 昭和17年にまず単線が開通し 工事をすすめること さらに2年 昭和19年には上下線ともできあがった。完成までには潜函法・圧気工法・シールド法など幾多の工事方法を駆使し 丹那トンネルとともに特筆すべき工事となつた。



関門トンネルの地質断面

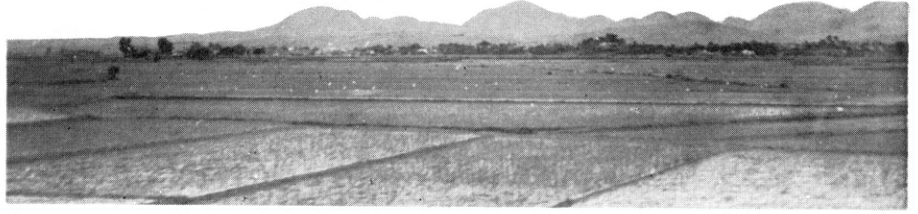
うがつた3,600m余は凝灰岩・砂岩の硯石統(中生層)と それを貫いた花崗岩の岩盤で硯石統は 硯を産することからこの名が起り山口県の赤間関石 門司の門司硯はあまねく知られているところ。赤・青の色彩がまことにあざやかで



その名もゆかし梅花石

ある。

門司市に産する
もう一つの石 ^ひ梅
花石は門司の半島
先端部の凝灰岩層
中に散在し 世の
好事家の古くから
珍重する所で “皇室への献上” でも話題を
生んだ。



宇佐町付近からは開析された両子山の峯々が車窓に映る

である。

小倉駅から20分 門司の半島の根つこを横断
周防灘に面した 地味豊かな豊前平野が広がる。

途中の丘陵には石炭の採掘場がみられ 坑口
やトロッコなどの雑然とした風景が散見される。
ときには忙しそうなる人影も見られるが このあたり
は筑豊炭田としては裏通りである。

工業地帯から農業地帯へ

門司港はまた北九州工業地帯の玄関でもある。
海陸交通の至便さ 背後にひかえた筑豊炭田など
良好な立地条件によって 九州北端はわびしい漁
村から大工業地帯に発展した。北九州の象徴
八幡製鉄所の煙突群から吐き出される赤い煙を行
く手にみながら 汽車は小倉から東へ進路を転ず
る。 **ここから日豊本線の旅が始まるの**

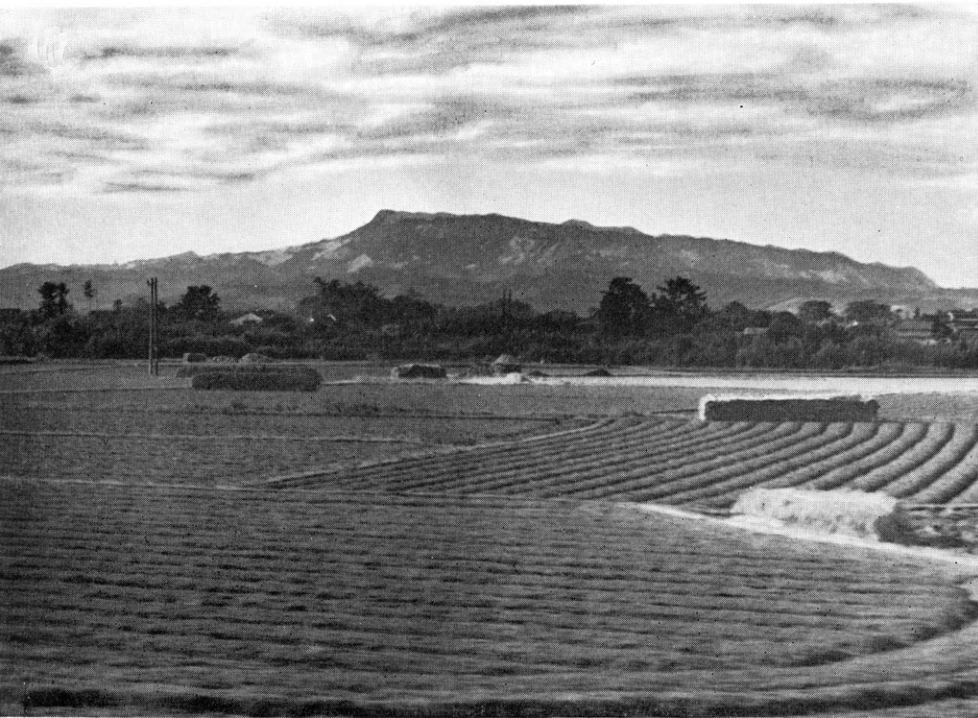
一度花崗岩の山地を南に望み 苅田付近で再び
現われる古生層中には 厚い石灰岩の層が発達し
その採石場もまっ白い肌を見せている。

この石灰岩の層を南東方へ追つてゆくと その
延長に 戦後脚光をあびてきた平尾台が観光客を
集めている。その地下深く 底知れぬ鐘乳洞がつ
らなり 地下水のたくましい営力は 山口県の秋
芳洞と並ぶ大地下
洞となっている。

北九州の屋 根を望んで

^{ひこ}
英彦山(1,200m)

山塊から流れ下る
今川に臨んだ行橋
から 国見山をな



← 中津を過ぎたところ 豊
前平野の先にそびえる
メサ地形の八面山



日の出をすぎて 眼前に広がる別府湾に一きわ目だつ 高崎山の山容

がめながら一時間で 文字通り豊前平野の中心をなす中津に到着。ここは城下町で福沢諭吉の出生地 また山国川をさかのぼる耶馬溪線との分岐点である。

英彦山・国見山をはじめとし 豊前平野南方につらなる袴腰に似た山々は 新しく第四紀に活動した火山群であつて この山なみはこれから大分付近まで車窓につづく。

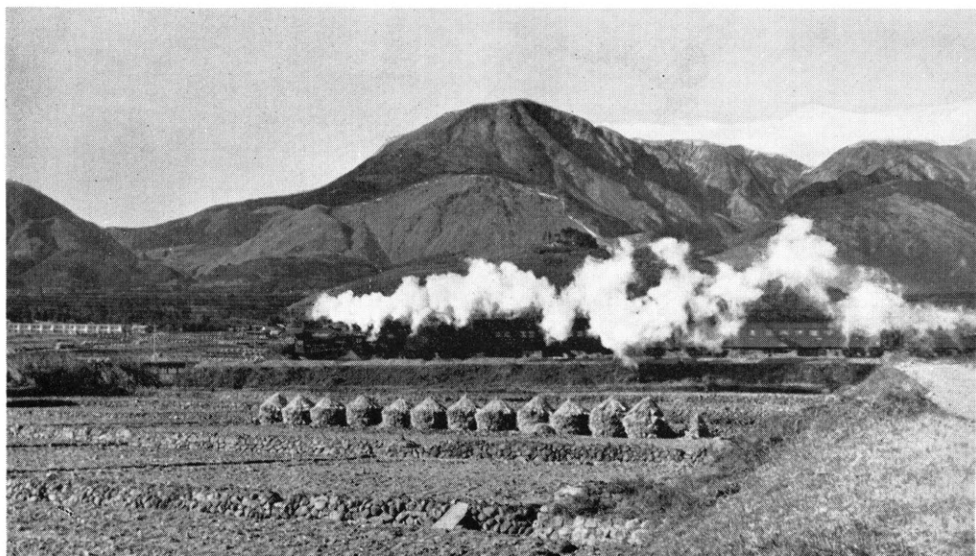
阿蘇山・九重山・耶馬溪熔岩などは九州の尾根を形づくつて茫漠とひろがつている。これらの熔岩でできた山山のうち 車窓からでは 中津をすぎて遠望される安山岩の八面山(659m)のメサ地形がとくに印象的である。

平坦地を海岸に沿つてさらに数10分 八幡様で知られた宇佐付近に近づけば 両子山ふたごが行く手にひかえている。

三方を海に囲まれた両子山(721m)火山が 姫島をしたがえて こぶのように東に飛び出して 周防灘と豊予海峡とをわかし 南に波しずかな別府湾を抱きかかえている。

その国東半島の根下の華ヶ岳・雪ヶ岳の間を 押し分けるように進み立石から中山香付

亀川・別府間から見上げる鶴見岳のドーム この背後に由布岳がある



近で 突起した鋸山の南を抜けて東にはしる。

この付近で 汽車は新しい火山岩の下に顔を出した古い安山岩や花崗岩の洞中をすすむ。馬上・国富の鉾山のあるのもこのあたりである。

杵築きつきで方向を南にまげ日出ひじに出ると そこで車窓に突如として別府湾がひらける。

別府湾をめぐる

日出を西すれば 湾を南からささえている佐賀関半島が 大煙突を押立てている姿まで はるかに見わたされる。これから 景勝の海辺を 西から南へ その大煙突の根下まで半周するわけである。そこで 瀬戸内海に別れをつけ 小さなトンネルを抜けて亀山に達すれば 既にここは別府温泉境の入口 山手には鶴見岳(1,375m)の大ドームがそびえ その背後には兄貴分の由布岳(1,584m)がひかえている。鶴見岳の右側は硫気作用による崩壊がいたいたしい。

裾には 鶴見原・石垣原の扇状地がゆるい傾斜をみせ その右手には別府名所地獄の白い噴気かんをわのぞまれる。このあたりが鉄輪温泉群。

行く手に目を転ざると別府市街も目前で 背後の高崎山がせり上がってくる。

別府は瀬戸内海航路の終点で 温泉・お猿と観光条件を揃え 西の雲仙・長崎と張りあつている。温泉の湯口4,300余 1日40万石余の湧出量は

まさに世界一を誇り さらに 砂湯によつてもあまねく人の知る所である。

別府東方の南立石温泉には 地熱開発の実験地があり 先般 30 kw の発電機を まがりなりにも動かすのに成功したことは 御存知の方もあろう。

別府を過ぎれば 城跡というよりもお猿で名を売っている安山岩の高崎山が 急傾斜で海に迫り 鉄道・電車道・国道とが まつ青な波しぶきにぬれんばかりに並んでいる。ここ10分たらずの間は おそらく日豊線で最も見ばえのある風景といつてさしつかえないであろう。

高崎山をめぐれば 別府から15分で大分に着く。

佐賀関半島を横断

大分は久大線・豊肥線を分岐し それぞれ九重山・阿蘇山の麓をまわつて九州を横断 東九州へ抜けている。

もし旅路に暇さえあれば 別府で一風呂浴びて九州本島最高の九重 (1,787.9 m) や 世界最大のカルデラを有する阿蘇 (1,592 m) の雄大な山容にぜひ接したいところ おいそぎの方はせめても写真でその雄姿を想像していただこう。

鶴崎を過ぎ 大野川をわたり さらに東すれば



別府濱をへだてて 高崎山の急斜面と 別府市街地

行く手に再び佐賀関製錬所の大煙突が望まれる。対岸の四国からも見えるという 東洋一を呼称する 166 m の大煙突も 製錬技術の発達した今では すでに無用の長物となり ものうげに地上をへいげいしているに過ぎない。

汽車は残念ながら大煙突の真下までは行かず 幸崎から南へ折れ 佐賀関半島をつつきつて南へと向かう。

この半島で 火山の景観が車窓から失せると 中部地方から延々と帯状に分布する三波川結晶片岩の 縞模様のある緑つぼい岩肌が現われる。さらに南下すれば 山を下つたところから白堊紀層の山地が続く。この地層の広い谷間は阿蘇山から流下した熔岩で埋めつくされ 車窓からみる丘

北側からみた九重火山群とその熔岩台地

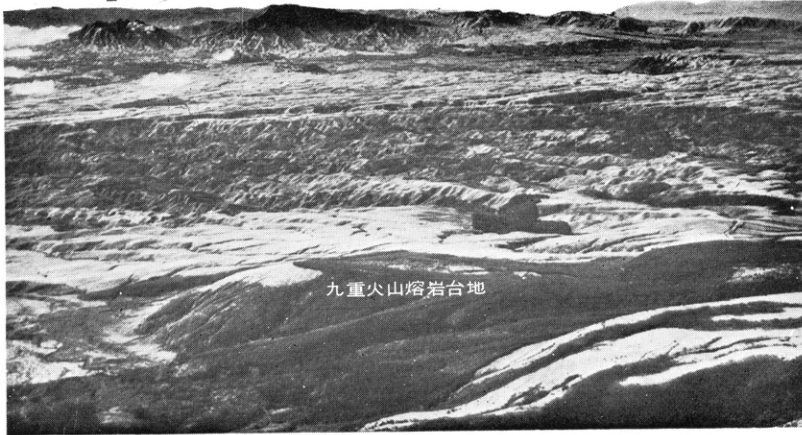


北側から見た九重火山群とその熔岩台地

根、
子
岳

高
岳

立
野
火
口
瀨



九重火山熔岩台地

←九重火山からみた
阿蘇五岳 文字通
り 九州の屋根

陵末端の急崖には いずれもそのどす黒い岩肌を顔を出し 下の江駅付近では石材として切り出している。

九州のど真中を地中深くえぐっている阿蘇山はただにカルデラの大きさのみならず 吐き出した熔岩や軽石の流れの膨大さも比類なく 大分・宮崎・熊本3県にわたって中部九州一円を覆い 往時の活躍がしのばれる——もし現在そんな噴火があつたとしたらどうであろうか。

あまべ 海辺九十九浦

白杵で九州をけさ切りに切つた大断層 白杵・八代線を一またぎすると ここから南は四国から九州にかけて東西にのびた中・古生層（正しくは時代未詳中生層といわれている）の地帯となる。

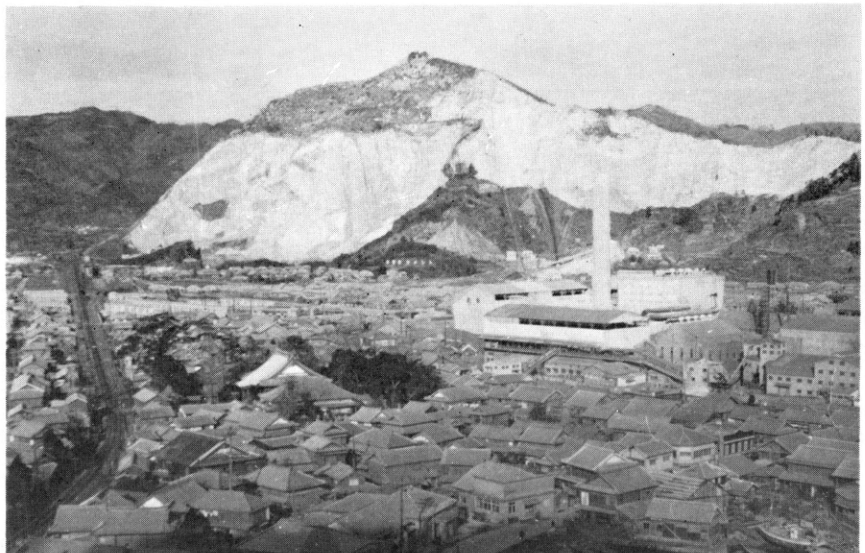
これらの地層の一部が海に溺れて生じたリ

無尽蔵の石灰岩の山を→
ひかえた 津久見の市
街とセメント工場

てならんでいる 佐伯までの20分はトンネルを過ぎれば遠く島島が見える入江があり その奥まつた所に漁村が小じんまりと集まり ほどなく山の上まで段段島で覆われた岬の根下をよぎつて次の入江が展開する………といった日本的な風景が飽きることなく続く。

多くの入江は 漁港・開港場に適するのみでなく 海にせまつた石灰岩層が新しい繁栄をもたらしている。

津久見は そういつた条件に恵まれたセメントの町で 町ぐるみ白一色。高さ 250mに達する石灰石採掘場やセメント会社の工場の展望は トンネルを抜けるまで漁村の姿を想像していた車中





← 津久見背後の石灰岩の山肌
 双のように石灰岩の岩肌がとび出し
 じょうご形のくぼみ(ドリネ)がみえる

して 水の電解を行い それに
 硫化鉍と塩とパルプとをもち込
 んで 硫安・ベンベルグを中心
 とする30余種の製品を産み出す
 一大電気=化学コンビナートが

の眼をみはらすのに充分である。

年産110万トンのこのセメントは 日本第2
 位と称される。

日向路へ

佐伯からは 残念ながら鉄路は海岸から離れ番
 匠川をさかのぼって中生層の山合いに入る。平凡
 な堆積岩も 直見にいたる間 ところどころに水
 銀の鉱床があり 戦争中には採掘されたことがあ
 る。番匠川にかかる鉄橋付近にはその選鉱場の
 跡がのこっている。

佐伯から約1時間 同じような砂岩・頁岩が際
 限なく連続した見栄えのしない地層を幾つかのト
 ンネルでくぐりぬけ 宗太郎駅に着くころは お
 そらく車中の読者諸兄もたいくつで 眠気におそ
 われている頃であろう。

汽車は一気に宗太郎越を抜け 眠りのさめぬ間
 に豊後の国・大分県を離れ 肇国の伝説を秘める
 日向の国 宮崎県に入る。しばらくの間はなお
 たいくつな地層が続くが 市棚を過ぎてトンネル
 を抜ければ 明るい石英斑岩の縁を南進しはじめ
 る。この頃から北川の流路も漸次広がり ベンベル
 グの町延岡もほどちかい。

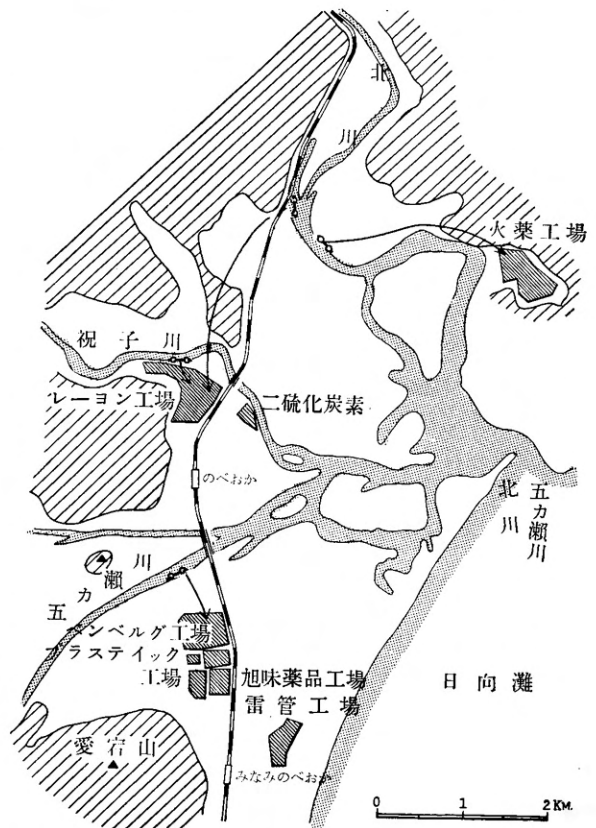
水で生まれた工都延岡

祖母山(1,758m)に源を發し それから伝説の
 高千穂峡をうがつ五ヶ瀬川の清流沿いに 先駆者
 野口遵つくるところの工都延岡がある。

10km²あまりのこじんまりした一種の三角洲平
 野だが ここに水力発電でできた電気をベースと

できている。

30年の歴史をもつ工場都市ではあるが 水はあ
 くまで清く 町は花で飾られて活気があふれて美
 しい。五ヶ瀬川・祝子川(ほうりがわ)・北川
 それに豊富な地下水と合わせて 一昼夜30万m³
 が工業用に揚水されている。なかでも祝子川の
 地下水を利用しているレーヨン工場の用水条件は
 すばらしい。 (地質部)



旭化成の工場では冷却用に豊富な河川の水
 を用いている (矢印がその取入れの関係を示す)